

# 子どもの発達や行動と事故予防

## ～現場で出来る応急手当～

カナン子育てプラザ2 1 病児保育担当 看護師 直井みどり

### 1. はじめに

保育園での事故は、保育者がいくら努力しても防げない場合が少なからずあります。保育園でよく起こる、子ども同士の衝突事故も同様です。子どもたちが元気よく走りまわっている中で、衝突を防ぐことはとても難しい課題です。勢いあまって、遊んでいる別の子どもを突き飛ばしてしまったりすることもよく起こります。その時に、床や地面にとがった物や硬い物、むき出しのコンクリート・ブロックなどがなければ、負うケガは軽くてすみます。園庭や保育室の環境整備・点検をすることで、事故が起きた時のケガの程度を軽くすることができます。また、保育者が、「子どもの成長・発達の過程では、ケガ必然的に起こる」「集団生活は、子どもの育ちにとってとっても大切、でも集団であるがゆえに起こるケガがある」という実態を知り、発達過程と事故の関係を理解する。そして、保育者同士で、子どもへの関わりを考えたり環境改善をしたり、保育中に連携を取って子どもを見守ることで安全に子どもが生活できることを保障します。

### 2. 子どもの発達と起こりやすい事故・・・資料参照

### 3. 事故・ケガの内容と応急処置

事故・けがの内容	現場での応急手当	配慮と <u>予防</u>
すり傷 切り傷 刺し傷	①目に見える破片はつまんで取り除く、細かい泥や破片はきれいな水で傷口を洗い流す ②出血部を清潔な指やガーゼ、タオルなどで傷口を閉じるように圧迫する。5分以上強く圧迫すれば、ほとんどの場合止まります ③傷口は消毒をすると組織を損傷させるために、傷の治療がかえって遅れます。消毒液は塗らないで、表面が乾かないように被覆材(キズケアパット)で密閉して治します<モイストヒーリング療法> *抗生物質の軟膏を塗布する方が良い場合もある	・乳幼児は転倒や転落した時に傷をつくりやすい。 ・ <u>園庭、駐車場、散歩コースや保育室などに危険なものが落ちていないか触ってケガをしそうな箇所はないか点検する</u> ・血液に触れることがあるので、使い捨て手袋を使う。 ・植物や小さな木片は、とげ抜きで抜いてみます、抜けなかったら病院受診をする ・きれいにならない深い傷(ガラスや木の破片など)、大きな傷は病院受診をする ・被覆材にかぶれる子どもがいます ・翌日傷が赤くはれている場合は、被覆材を中止し病院受診をする
かみ傷 ひっかき傷	①流水でよく患部を洗い、滅菌ガーゼで冷やす *動物や鳥に噛まれたり、ひっかかれたり、つつかれた時は病院受診をする	・飼われている動物でも、むやみに近づかない ・ <u>散歩で草むらや山に行く時は、長</u>

	<p>②人のかみ傷・ひっかき傷の場合は、モイストヒーリング療法をする。ひどく噛んで、内出血している時は、その上から冷湿布をする、 * <u>噛んで傷がない場合は</u>、滅菌ガーゼでよく冷やして、冷湿布をする</p>	<p><u>ズボン、長袖で危険を防ぐ</u>  <u>・園で飼っている動物の扱い方を教える。触った後は、よく手を洗う。</u>  <u>・友だちへの接し方・触り方を一緒にしていく(好き好き・だっこなど)</u>  <u>・取り合いになった時は、思いを仲介する</u>  <u>・言葉での意思の伝え方を保育者がモデルになる</u></p>
打撲	<p>・すり傷や切り傷がない時は、患部を冷やして冷湿布をする、長くても2時間くらいではがす  ・痛みの緩和の軟膏(モビラート軟膏やヘパリン軟膏など)を塗って冷湿布をする</p> <p><b>&lt;頭部打撲&gt;</b></p> <p>・患部を冷やして、痛みの緩和軟膏を塗り安静にする、24時間は室内安静としおう吐・発熱・けいれんなどの経過をみる</p> <p>・顔色が悪くなったり、おう吐したり、一過性であっても意識がなくなった脳しんとうなどの症状があった場合は、脳外科を受診する</p>	<p>・頭が重く、重心が高いのでバランスがうまく取れない、頭部や顔からの転倒・転落が多い、視野が狭く動きも敏感でないので子ども同士が衝突する</p> <p>・顔などがぶれやすい部分は一枚ガーゼを当て湿布する</p> <p><u>・乳児では、ベッドから落ちる、だっこやおんぶをしていて落とすなど保育者の不注意</u></p> <p><u>・年齢や発達行動に応じて保育者が関わり、注意を払っていく</u></p> <p><u>・大型固定遊具や三輪車・スケーターの安全な遊び方を教える、子どもたちと話し合う</u></p> <p><u>・ベランダや窓の下には踏み台になるものは置かない</u></p> <p><u>・プールの周りに滑り止め効果とクッション効果の両方をもつシートを敷く</u></p> <p><u>・トイレの床や手洗い場の周りは、こまめに水気を拭く</u></p>
虫さされ	<p>①刺された部分を流水で洗い、ムヒ軟膏や抗ヒスタミン軟膏(レスタミン軟膏)を塗る</p> <p>* 毒ガや毛虫に触った場合は、はらったり、こすったりしない、セロハンテープがあればそっと貼り付けてからはがし毒針を抜く、または水を強く出して洗いながします。腫れてきたり痛がる時は<b>皮膚科を受診します</b></p> <p>* ミツバチは刺した後に、針を残します。残っている針の皮膚の近い部分(毒嚢は押さえないように)をピンセットでつまんだり爪ではじき飛ばし</p>	<p>・蚊は、5月～9月頃まで続きます。<u>部屋にはベープマット、園庭・ベランダには蚊取り線香を置いて蚊の侵入を防ぐ</u></p> <p><u>・毛虫の発生を防ぐために、春と秋に駆除する</u></p> <p><u>・ハチは、7～10月頃神経過敏になって刺すことが多く、巣に近づいたり巣の近くで大きな声で騒いだり、走りまわると刺されます。ハ</u></p>

	<p>ます。じん麻疹がひどかったり、ショック症状があれば、早急に病院受診します</p>	<p><u>子は、人の目を狙ってくることが多いので、子どもには顔を伏せてできるだけ静かに離れさせます。ハチは動くものを攻撃するので、保育者が木や服などを頭の上でぐるぐる回し、こちらに引きつけながら子どもを巣から 50m以上離します。</u></p>
口の中、歯の外傷	<p>①出血があれば、傷口を滅菌ガーゼで押さえて圧迫止血する、ただし、口の中で圧迫止血が難しい場合は滅菌ガーゼをかませて止血する</p> <p>②子どもが嫌がらなければ、イソジンガーゲル液でうがいをする、また口の中の傷も消毒する(うがいのできない年齢はしない)</p> <p><b>*歯の外傷は、外力が弱くても数か月後に変色してきたり、乳歯の場合は処置をしないと永久歯の発育に影響がでる場合もあるので、出来るだけはやく歯科受診をする</b></p> <p><b>*永久歯が完全に抜けた場合の処置は、抜けた歯は、牛乳、唾液(子どもの舌の下に抜けた歯を入れる)などに入れて保存する、特に、受傷後 30～1 時間以内では再植の成功率が高いとされています</b></p> <p><b>&lt;歯ブラシや箸、おもちゃをくわえたまま転ぶ&gt;</b></p>	<p>・1～2 歳児では転倒が多く、3 歳児からは友だちとの衝突、遊具での事故がある</p> <p>・部位は、上の前歯が多く、乳幼児では脱臼が多く、折れたり欠けることもある</p> <p>・数日間は、硬いものを患部の歯で噛み切らないようにする</p> <p>・口の中に傷があり、濃い味や酸っぱいものはしみるので食事の工夫をする</p> <p><b><u>・口に物をくわえたまま、歩いたり走ったりしないように子どもを注意して見る</u></b></p>
鼻出血	<p>①上体を起こし、少し前屈にして、小鼻を指でつまみ、10 分くらい圧迫します、<b>&lt;この時鼻の中には何も入れない、ティッシュや綿球をつめると、それを取り除く時に再出血する&gt;</b></p> <p>②鼻のあたりを冷たいタオルで冷やすと、血管が収縮して止血しやすい</p> <p>③出血が止まりにくい時は、滅菌ガーゼを切って軽く鼻の中に入れて、鼻を強くつまみます</p>	<p>・鼻をいじったり、打ったりして起こります、一度鼻出血が起こり粘膜の傷口が完全にふさがらないうちに、再び鼻をいじると繰り返すことがあります</p> <p>・15 分以上止血しない場合は耳鼻科を救急受診します</p>
鼻の異物	<p>① 鼻をフンと強くかませる、また異物の一部がのぞいているならそっとつまみ出す。無理は禁物</p> <p>② 取れない、見えない時は耳鼻科を受診する</p>	<p>・おもしろ半分、ままごとコーナーに置いてある豆やスポンジ、ビーズを鼻につめる。本人が「入れた」と言う時であれば、風邪でもないのに鼻が詰まっている、悪臭がする時は異物挿入を疑う</p>
目の外傷や異物	<p>①ボールやおもちゃを目にぶつけられた時は、見た目にまぶたの腫れ、白目の出血がある、目が痛</p>	<p><b>*子どもは、びっくりして目をこすってしまいます、それ以上こすらな</b></p>

	<p>い、見えにくいなどがある時は安静を保って眼科受診をする&lt;&gt;</p> <p>②目に保育者や友だちの爪や指が入った、本の角が当たったなど、痛みがある時は眼科受診をする</p> <p>③砂などが入って、洗眼しても目が痛くて開けない時は、角膜に傷が付いていることがあるので眼科受診する</p>	<p>いように注意し、痛い時は眼球を圧迫しないように滅菌ガーゼで冷やす ①、②については</p> <p><b>ほとんどの場合眼科受診をする</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・洗眼は、製精水をひと肌に温めて注射器で優しく眼に注入して洗う</li> </ul>
<p>のどに異物 (窒息)</p>	<p>①おもちゃ、ボタン、プチトマト、吐乳などによるのどの異物では、激しい咳きこみや呼吸困難が見られる&lt;原則は「口の中に指を突っ込んで取り出してはいけない」&gt;</p> <p>③ 乳児では、背部叩打法 ←→胸部圧迫法 少し大きい子どもは、背部叩打変法 年長児ではハイムリッヒ法 平手で4~5回叩きます</p> <p>③どうしても異物が取れず呼吸困難が強くなってきた時は、心肺蘇生法を行いながら救急車を呼ぶ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>午睡中の乳児の場合は、吐乳が原因で窒息を起こす可能性がある</u>ので、<u>排気をさせて寝させる、また排気が十分でない場合は上体をあげて寝させる。睡眠呼吸確認チェックをする</u></li> <li>・<u>食事中に笑わせたり、驚いたり笑ったりして、急に大きな息を吸った時に起こりやすいので、ゆっくり落ち着いて食事をする</u></li> <li>・<u>食べ物は、十分咀嚼して食べるように促す、一口量が多くないように切ったり量を調節する</u></li> </ul>
<p>毒物等の誤飲</p> <p>除去の食材を食べる</p>	<p>①誤飲時の処置は気づいた時点ですぐに吐かせるのが原則です。舌の奥を指やスプーンなどで下の方に押し吐かせます。なかなか吐かない時はや液体異物の場合は水や牛乳を飲ませてから吐かせます。</p> <p>②処置をして病院受診をする</p> <p>* 大部分の医薬品は、牛乳を飲ませてから吐かせる。トイレ用洗剤や漂白剤などは、牛乳を飲ませる、吐かせない</p> <p>①誤飲時の処置は気づいた時点ですぐに吐かせる舌の奥を指やスプーンなどで下の方に押し吐かせます。口のまわりを洗う</p> <p>②ゼーゼー呼吸困難、腹痛、血圧低下、意識障害を伴うときは救急車を呼びます</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小量の誤飲でほとんど無害なものは、クレパス・クレヨン・絵の具・消しゴム・粘土などです</li> <li>・調理に使うホイルや花はじき、割れた風船の破片、砂や石などを飲みこむことがあるので、<u>保育室内の安全点検や0歳児が園庭で遊んでいる時は目を離さない</u></li> <li>・<u>0歳児の保育室には、トイレトーパーペーパーの芯を通るおもちゃは常時置かない</u></li> <li>・<u>洗剤、漂白剤、消毒薬が子どもの手の届く場所に置かない。ホウ酸だんご、殺虫剤(ベープ・蚊取り線香など)を放置しない</u></li> <li>・<u>漂白剤・しゃぼん玉液などのうすめ液をペットボトルで保管しない</u></li> <li>・<u>除去食(完全除去)を間違いなく子どもに提供できるようにマニュアル通りに実践する</u></li> <li>・アナフィラキシーショック症状に</li> </ul>

<p>骨折、脱臼 捻挫</p>	<p><b>骨折</b>＜完全骨折・ひびが入る不完全骨折＞ *骨折すると、骨折部の痛み、腫れ、変形、皮下出血がみられます</p> <p>①皮膚に傷がみられない<b>単純骨折</b>は、骨折部を安静に固定します。固定後は腫れを防ぐために、できるだけ患部を高くして、冷やして整形外科を受診します。</p> <p>②皮膚の傷を通して、骨が外から見えている<b>複雑骨折</b>は、傷は滅菌ガーゼや布で圧迫し、骨折部も固定して、救急車を呼びます</p> <p><b>脱臼</b>・・関節が外れたもので、特に肩、肘、指に起こりやすく、激しい痛みのために自分で動かすことはできません</p> <p>①関節周囲の血管、神経などを痛めるため、脱臼をはめてはいけません</p> <p>②患部は、子どもが一番楽な位置で固定して整形外科を受診します。</p> <p><b>捻挫</b>・・関節が外れかかってもどったもので、起こりやすい部分は足首、手首、指、膝です</p> <p>①はれと痛み、皮膚の変色がみられます、患部を冷やし(冷湿布)、様子を見ます</p> <p>②関節の腫れや痛みが続く場合は、骨折を疑い整形外科を受診します</p>	<p>気をつけながら様子を見る</p> <p>・固定には、患部の上下の関節を含めるくらいの長さ、強さ、幅を持つものであれば何でもよく、たたんだ新聞紙、週刊誌、段ボール紙、板、かさ、棒などを利用します。皮膚と添え木の間にはタオルなどを入れ、手足の先の結構を防がない程度に包帯、バンダナなどで固定します</p> <p><u>・肘内障は、腕を強く引っ張ることや、衣服を着せたり脱がせたりするときに強引に手や腕を引っ張ると抜けることがあります、また、何回か繰り返すとちょっとしたことで抜けてしまいます</u></p>
<p>はさみ傷 物が落ちてきた 指・爪</p>	<p><b>指をドアにはさんだ</b></p> <p>①水で冷やして、冷湿布をする</p> <p>②いつまでも痛みが引かない、指が曲げられない腫れている時は骨折しているかも整形外科を受診します</p> <p><b>突き指をした</b>・・急に強い力(ボールを取ろうとして)が指に加わり腱や靭帯伸びたり切れたりする</p> <p>①氷と水を入れた洗面器などで指を冷やします</p> <p><b>爪に血豆ができた</b>・・足の指に花びんなど重いものを落としたり、指をドアにはさんで出来ることがある、爪の下の細い血管が破れて起こります</p> <p>①冷たいタオルや流水で冷やします。それほど痛みがなければ、そのまま様子を見る、</p> <p>②痛みがある時は、整形外科を受診する、爪に穴を開けて血液をだすこともある</p> <p><b>爪がはがれた</b>・・爪の上に重いものが落ちたり、何かに強く圧迫されて、はがれたりはがれそうに</p>	<p><u>・ドアの開け閉めのときは、近くに子どもがいらないか確認する、静かに閉める。引き戸や窓にクッション材をつける、また蝶つがい部分の隙間にエアークッションでカバーする</u></p>

	<p>なったりなる</p> <p>①爪がはがれたときは、爪をもとの位置にのせてガーゼで押さえて受診します。ただし、はがされた爪がもとに戻って指につくことはありません。</p> <p>②爪がはがれそうなときは、はがさないでガーゼで圧迫止血しながら受診します</p>	<p>・爪の根元が健全なら新しい爪がでてきます</p>
溺水	<p>小児ではシーズンに関係なく発生します、 * 溺水時間が5分以上になれば、多くの例は死亡するか後遺症を残します。</p> <p>①早急な発見</p> <p>②ほとんどの場合は胃の中に大量に水を飲んでいきます、片ひざを立て、膝の上に子どもをのせ、頭を下げて背中を叩いて水を吐かせます</p> <p>③意識、呼吸がなければ心肺蘇生をすぐにはじめ救急車を呼ぶ</p>	<p>・<u>水遊びをしているときは、子どもから目を離さない</u></p> <p>・<u>保育室や園庭に水がたまったバケツや洗面器がないか毎朝チェックするく水たまりでも起きます</u></p> <p>・<u>トイレに0~2歳児は、特に一人で行かせない、汚物洗いや水洗トイレの水に興味があり触り、手がすべり便器などに頭を突っ込む</u></p>
SIDS 乳幼児突然死症候群	<p>SIDS・・・元気だった子どもが睡眠中に何の前ぶれもなく死亡する、死亡原因は剖検によっても分からない病気。死亡する子どもは、ほとんどは1歳未満児で特に生後2か月~6か月に最も多くみられる</p> <p>①発見時、名前を呼び刺激(足の裏を叩く)を与えてみる</p> <p>②反応がなければ、すぐに心肺蘇生をはじめ、救急車を呼ぶ</p>	<p>・<u>子どもを寝かせる時は、仰向けに寝かせる</u></p> <p>・<u>寝ている時は、タオルケットを頭からかぶせたり厚着をさせない</u></p> <p>・<u>睡眠時は、子どもから目を離さず、5分置きに呼吸確認をして表に記入する</u></p>
熱中症	<p>日射病・・・直接日光に当たる場所や気温や湿度が高い所で長時間遊んでいて、急にぐったりして元気がなく脱水による循環不全で血圧低下、脈が速く冷汗がでる</p> <p>熱射病・・・体温の調節ができず、体温が40℃以上に上昇する。熱射病は手当が遅れると臓器障害により死亡することもある、一刻も早く病院受診をする</p> <p>①急に冷房の効いた部屋に入るよりも、まず木陰の涼しい所に移し、衣服を緩め、仰向けで下半身をやや高めに寝かせて安静にする、体温上昇がある時は、冷たいタオルを額、首のつけ根、両脇、両太もものつけ根を冷やす</p> <p>②すいぶん汗で失われた塩分を補給する</p> <p>③皮膚が冷たかったり、震えがある時は皮膚をマ</p>	<p>・<u>夏場はつばの広い帽子をかぶり、吸湿性・通気性のある服(綿のTシャツなど)で十分な水分・塩分をこまめに補給する</u></p> <p>・<u>遊びの途中で休息をとるようにし、高温多湿の環境に長時間いないようにする</u></p> <p>・子どもは、かくれんぼが大好き、狭い所に入るのも好きです、子どもの遊んでいる様子は保育者同士が連携して見守ります</p> <p>・乳幼児用のイオン飲料や薄い食塩水を飲ませる、一般のスポーツドリ</p>

	ッサージして血行をよくする ④水が飲めない、意識がもうろうとしている場合は、すぐに救急車を呼ぶ	ンクは塩分が少ないので適していない
--	--	-------------------

#### 4. おわりに

子どもは日々育っています。「～ができるようになりたい」「～に興味を持つようになった」「～をするときっと楽しい」「～に挑戦してみたい」、子どもは毎日、こんな気持ちを心の中に抱いて園生活をしていきます。そして、実際に「やってみよう」と挑戦してみて・・・！ちょっと失敗してケガをしたり、やりすぎてケガをしたり、友だちと一緒にしたいけどうまく言葉で言えずケンカをし、思わずケガをさせたりなどします。子どもの事故予防、子どものケガ予防、安全は、こどもの一人ひとりの育ちと表裏一対です。事故予防や安全のポイントは、保育者一人ひとりが専門家として子どもの育ちや変化を的確に捉えて園全体として考えることが大切です。また、保護者には、園生活で子どもが心身ともに元気に生活できるように、生活リズムの安定や朝食を食べるなどの協力をお願いしています。

参考資料 保育保健の基礎知識 2013 監修 巷野悟郎 日本小児医療出版社  
 乳幼児の事故予防と応急手当 監修 帆足英一 企画室  
 乳幼児の事故予防 著書 掛札逸美 ぎょうせい  
 子どもの事故の応急手当マニュアル 監修 京都第二赤十字病院 小児科 長村敏生  
 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター